



TITLE:

雑報

AUTHOR(S):

CITATION:

雑報. 天界 1922, 2(16): 64-65

ISSUE DATE:

1922-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159669>

RIGHT:

雜報

●天文協會のボツダム會議

一八六三年創立以來世界的協同事業に大なる功績を擧げた國際天文協會 (Astronomische Gesellschaft) も、主唱者たる獨逸が戰禍の中心地であつたため、長く沙汰を聞かなかつたが、昨一九二一年八月に至つて、其の二十四日から二十七日まで四日間、八年ぶりで總會をボツダムに開いた、今其の模様を聞くに、總會議長は丁球コペンハーゲンのストロエムグレン教授、それに參加したのは、約二百名で、國は十六ヶ國にわたつてゐたといふ。其の主な學者の名を擧げると、スウェーデン國からはストックホルムのボーリン教授、ウプサラからはフガン・ツサイベル教授、ノルエイ國からはグリスチャニアのルース氏、フィンランド國からはフルイエホルム氏、オランダ國から有名なカプタイン教授や、フアン・リーン、エシユ兩氏、英國からはエディントン教授及びコレティ師、又、獨逸人としてはパウシנגル、ハルト井ヒ、アインシュタイン、グロスマン、チルンスト、ルンゲ、シヨル、ダキヘルト、ブライ、キインレ等の諸教授であつた。

ストロエムグレン教授は其の演説で、戰爭中、コペンハーゲン天文臺が、キールの中央局に代つて國際天文報導を支持したこと、それから又、論文や報告類の交換送達を媒介したことを述べ、喝采を博した。

會合中、多くの論文が發表され、皆何れも最近天文學上の進歩發展に資するものであつた。例へば、ハゲン師は多くの暗黒星雲を紹介し、キユル氏は今まで望遠鏡や寫眞で觀測された新事實の若干を解釋し、ツアイベル氏は星團中の星々の質量が理想ガス體内の分子と同じ法則に従つてゐることなどを述べた。

ロゼンベルグ氏は星の光力を測るための光電法の改良設備を説明し、之れによつて、實に星の光度の一萬分の一をも測ることが出来ることを示した。又スウェーデンのダム氏は只一度の寫眞撮影によつて、星の色を簡単に決定することが出来る方法を述べて、會衆一同を驚かした。之れは將來の天體物理學上、非常に重要なことに違ひない。オランダ・ウトレヒトのモル氏は星のスペクトルの光輝の分布を測るため新しい測微器を紹介し、奥國ザインのカペンハイム教授は星の運動に關する一つの新説を發表した。

次年(一九二二年、即ち今年大正十一年)の日蝕にはオランダ領印度へ遠征隊を派遣するための委員會が任命された。これで、前年のエディントン教授が相對原理に關しアフリカでやつたのと同じ觀測が行はれる筈である。

一同は有名なボツダムの天文臺を訪れ、そこでは相對原理を實驗的に證明するためのアインシュタイン塔がフロインドリヒ教授によつて紹介せられた。此の際、天體物理の大家グトニク氏は新ベルリン天文臺長に、又、ルーテンドルフ氏はボツダムの新臺長に任ぜられた。このルーテンドルフ氏はかの戰時中機名を轟かしたルーテンドルフ將軍の弟である。一行は、又、同地の測地學會をも訪問し、いろんな立派な設備が見せられた。丁度米國アソナボリスと無線電信が交換されてゐる有様が、非常な興味を以つて見物された。

四日間の間、會合は首尾よく行はれ、一同は學術上及び友誼上、大満足を感じ、ボツダムの人々に對する感謝の念を覚えながら、別れた。

次會はコペンハーゲンで開かれる筈

●ステピンス氏 一九一三年以來米國イリノイ大學天文臺長であつたJ. ステピンス

(J. Stebbins)氏は今回ロムストク(G.C. Comstock)氏の後をついで、ワナシバアン天文臺長となつた。同氏は一九〇八年以來、セレンニウム光度計や光電光度計を天文觀測に用ゐた最初の人で、之れによつてアルゴールの第二極小光度を發見した有名な新進學者である

質 疑 欄

〔四〕 我太陽系の移動はヘルクレス星座又は琴座織女の方何れに向つて進んで居るのですか(GY氏)

〔答〕 一九一〇年頃ボッス氏が決めた結果では、赤經十八時二分、赤緯北三十四度三位、即ちヘルクレス座の一端で織女の西南十度足らずの方何れへ進行して居ることになります。これ等ばかり信用してよい結果でせう。

人によつて太陽系の進む方向が少し違つて書いてあるのは、其推算に使つた恒星の運動の大きさやスペクトルの種類によるので、やかましく言へば、どういふ材料を使つて勘定した所ではこんな結果になるさ一々こさわるより仕方ありません。しかし大抵織女の近傍といふことになつて居ます(KK)

〔五〕 邦文の球面三角法に關する初學者に適當な良書(GY)

〔答〕 (一)須永興平述、上野清校閱「球面三角法講義」(二)松村定次郎著「新撰三角法」(一)は大體トドハンターの本によつたらしく、色々幾何學的な性質や問題など詳しく書いてあります(修學堂發行、價一圓半位か)。(二)は博文館百科全書第六二編で平面三角の次に球面の部が説いてあります。單に球面三角法の基本定理を知るだけならば(二)でも充分です(KK)

〔六〕 一般星學に關する英文の見參考書(TM生)

〔答〕 一冊で星學全般をのせてある良書は影いやうです。

1. F.R. Moulton An Introduction to Astronomy. (Revised ed.) 1916

2. C. A. Young, A Text-Book of General Astronomy. (Revised ed.)

先づこの二冊がよいでせう。(一)は少し初歩的ですが仲々よろしい。價六圓半位(二)は少し最近の部分が足らぬかも知れませんが程度は(一)より少し高く有名です。一九一五年頃の發行のものは價八圓七八十錢。

これより詳しいのを御希望ならば各部門だけを説いた本を集めるかでもするより仕方ありません(觀)

〔七〕 若し變光星觀測をするにせよ眼の色盲検査の必要ありませんか。(TM生)

〔答〕 あるでせう。例へば或色の色盲なら其色味をもつた星は弱くなるでせうし。光度の強弱變化はわかるにしても極大と極小とで色の變る變光星の觀測などでは外の觀測者の結果と違ふかも知れません(KK)

△△△△△ 奇拔な火星觀測法

米國アマアスト天文臺長トド博士の友人だといふBマカファイ氏の言であるさて、一外國新聞の報するところに據れば

「トド教授は、南米智利國チャニヤラン(Chañaral)にある或る鑛山坑では、一九二四年に度々、火星が其天頂を通過することを發見した。吾人は此の堅坑全體を望遠鏡の筒として使ひたいと思つてゐる。直徑は五十フィートある。ガラス鏡を作るのが困難なので代りに、直徑五十呎の平らかな鐵皿に水銀を湛えやう。此の皿は或一定の速度で回轉させると、水銀面は丁度注文通りに凹面